ヨーロッパ宗教学会（2016）に参加

堀内みどり

6月28日～7月1日にかけて、ヘルシンキ大学で開催された標記大会に参加、発表した。

本年の大会テーマは「Relocating religion」。宗教という概念は常に可動的であり、歴史を通じて、場所・形・昨日そして概念を変えてきたという認識のもと、宗教のさまざまな概念は神学的あるいは政治的関心や方策に依存してきたとし、identity-work（自己決定の働き）、world-building（世界の形成）やwell-being（幸福や健康な状態）の枠組作りの手段として働いてきたが、一方では消費者利益やある種の保全の役割もあった。そこで、本年度の大会では宗教の種々の働きや役割を再検討し、その定義について再考することを目的とし、さまざまなアプローチによる研究が行われた。

毎日、基調講演があり、合計4人がそれぞれ講演を行った。なお、この大会は世界宗教学・宗教史会議の特別大会としても位置づけられていた。

堀内はパネル「Myth and Ritual」の中で、「What Does the Tenrikyo Funeral Rite Say to the Bereaved ?」と題して、天理教における葬送儀礼について言及し、神道の葬送儀礼との違いに触れつつ、残された人びと、特に遺族に対して儀礼が行われることの意義（故人の生涯の振り返りによる別れと出直しへの希望・遺族の死の受容）について述べた。天理教の葬儀は神道の葬儀に類似している（服装・式次第・道具など）と指摘されるところであるが、葬儀という儀礼が、教えの一つの表出とすれば、天理教の「出直し」という死生観をはっきりと端的に示すような葬送の儀礼が創出されることの必要、特に日本（日本人）以外でも理解されるような在り様の必要についても言及した。

ヘルシンキ大学は、1640年フィンランドの旧首都トゥルクに、スウェーデン女王クリスティーナによって創設された王立オーボ・アカデミーを前身とするフィンランド最古で最大の大学である。1812年のヘルシンキへの首都移転や、1828年のトゥルク大火を受け、ヘルシンキへ移転した。その後、1917年のフィンランド独立と共に現在のヘルシンキ大学となった。約38,000人の学生（5,500人の大学院生を含む）が在籍しており、4つのキャンパスに工学、法学、人文学、行動科学、社会科学、化学、計算機科学、数学･統計学、物理学、地理学、地質学、医学、農学、生物科学、薬学、獣医学、生物工学の各学部がある。

イーロン大学「宗教・文化・社会研究センター」主催の国際研究会に参加

堀内みどり

7月28日～29日に上記研究センターが企画し、インドのマドラス大学（チェンナイ）との共催で開催された国際研究会に参加し、研究発表を行った。

研究会のテーマは「To Take Place: Culture, Religion and Home-Making in and Beyond South Asia（南アジアの中で、また南アジアの地域を越えて起こっている文化・宗教・「家庭」形成）」。アメリカ、カナダ、インド、スリランカなどから60名余が参加し、15の発表があった。

堀内は、「The Ramakrishna Movement in Japan through the Activities of the Nippon Vēdānta Society (Vēdānta Society of Japan)」と題し、日本におけるインド人社会について、世界的に活動している現代ヒンドゥー教の一つであるラーマクリシュナ運動がどのように関わっているのかを発表した。ラーマクリシュナ運動の日本での拠点は「日本ヴェーダーンタ協会」（逗子市）で、インド哲学･宗教、ラーマクリシュナの教えを、主に書籍・勉強会やヒンドゥー教の祭典などを通して、日本人に伝えている一方で、在日インド人と日本人との文化交流の場を提供してきた。昨今多くのインド人ＩＴ技術者が東京の江戸川区に居住し、それにともなって構想された「リトル・インディア」立ち上げと日本ヴェーダーンタ協会との関わりから、日本における新たなインド人社会の形成について述べた。

イーロン大学（Elon University）は1889年創立のノース・カロライナにあるプロテスタント系の大学。学生総数約5,000人で、48の専攻がある総合大学である。

第75回日本宗教学会学術大会に参加

標記学術大会が、9月9日～11日にかけて早稲田大学戸山キャンパスで開催された。

9日に行われた公開講演会は、クラウス・リーゼンフーバー上智大学名誉教授が「意味への問い―宗教哲学の根拠づけのために―」をテーマに講演した。世俗化が進む今日において、伝統的な宗教自体も衰退する（逆の場合もあるが）中で宗教哲学の存在の意義すら問われるかもしれないという問題意識のもと、あえて宗教の提示する諸メッセージに基づいて宗教哲学の扱うべき事柄を「宗教哲学の根本問題」とテーマによって共時的に再検討し、「意味」の本来の在りようについて述べた。

学術大会には、約430名余が参加し、13の部会で多くの個人研究発表やパネル発表が行われた。

天理大学関係者の発表は以下の通り（部会順）

島田勝巳:井筒の「東洋哲学」とその外部（パネル「井筒俊彦の「東洋哲学」における宗教と言語」）

澤井義次:井筒･東洋哲学におけるインド宗教思想と言語（同上）

渡辺優：ミシェル・ド・セルトーのキリスト教論

山田政信：ブラジル系ペンテコステ派教会という宗教コミュニティ

深谷耕治：天理よろづ相談所「憩の家」の理念と事情部

堀内みどり：「いちれつきょうだい」に見る天理教の人間観

（堀内記）